

# 室生犀星論

—旧約聖書『ダニエル書』が童話『緑色の文字』に与えた影響—

中 島 賢 介

## はじめに

室生犀星（1889—1962）は、1920年（大正9年）から、堰を切ったように短編小説や童話を発表する。今回論じる『緑色の文字』は、短編集や童話集として刊行されていない作品のため、新潮社版『室生犀星全集』（1964）<sup>1</sup>には採録されていない。その後出版された『室生犀星童話集』（1978）<sup>2</sup>に他の童話とともに収録されている。

犀星と聖書との関連性を指摘した先行研究としては、久保忠夫の『室生犀星と古典』<sup>3</sup>などが挙げられる。『緑色の文字』は、旧約聖書『ダニエル書』に脚色した作品であるため、彼の聖書観やキリスト教観を研究するために関連性を裏付ける貴重な資料となる。また、この作品が掲載された雑誌が、女性雑誌であることから、女性雑誌の出版史や読者論と関連させて論じることができる。

今回は、『緑色の文字』と『ダニエル書』とを比較考察することを通して、聖書が犀星童話に与えた影響について論じる。

## 1 『緑色の文字』の出典

『緑色の文字』は、1921年（大正10年）『婦人界』第六卷第九号に掲載された。先述した通り、1920年代は、犀星にとって詩作に変わり小説や童話に力点を置く時代であったといえる。大正期の童話作品を年代順に並べると次のようになる。

- 1920（大正9年） 「星と老人」、「寂しき魚」、「蝗」（童話劇）
- 1921（大正10年） 「尼」「音楽時計」「緑色の文字」「塔を建てる話」
- 1923（大正11年） 「龍の笛」「お菊の縫物」「次王丸と縫姫」「龍宮」「蠅と蟻との話」  
「不思議な国の話」
- 1924（大正12年） 「上綏の主」「寂しき魚」「一茎二花の話」「こほろぎの話」「獵師」  
「あの時分とその後」
- 1925（大正13年） 「虹おとめ」「箏楽師用光」「仙人『桓闥』の話」「ゆめの話」
- 1926（大正14年） 「禁断の魚」「雪降虫上・下」「水中の園」（童話劇）
- 1927（大正15年） 「感情」（童話劇）「万花鏡」「白雲石」「鴉のいる島」「兵隊蟻」（童話劇）  
「山の蝉」「不思議な魚」

昭和元年には童話作品が姿を消し、次の年には、二作品「寄附金」「唱歌室」を残し一旦途絶えてしまう。その後童話を再び執筆するのは昭和9年であるため、この時期は童話創作の第一期であ

中 島 賢 介

ると考えてよい。

童話といえば、1918年（大正7年）7月「赤い鳥」の創刊により、童話が飛躍的に向上する時期を迎える。芥川龍之介や宇野浩二らによる童話に刺激されるかのように、犀星も創作を書き始めている。上記の作品は、いずれも児童雑誌、少年少女雑誌、女性雑誌に採録されているものばかりである。

そもそも、この作品が果して童話であるかどうか、内容からして子ども向きであるとはとても思えないといった印象がある。しかし、どの研究を見ても、この『緑色の文字』に関しては十分な考察がされていない。この作品が小説か童話かの判別が困難であるといった点があるのかもしれない。

童話の定義は、1970年代に盛んに児童文学作家や研究者の間で議論されたが、その中で『緑色の文学』は「子どもにも大人にも通じるジャンル」という部分に辛うじて含まれる程度である。ちなみに室生犀星作品年譜にははっきりと「童話」と明記されている。では、この童話が掲載された女性雑誌とは当時の女性にとってどのようなものであったか、その先行研究をまとめてみた。

研究例を分類すると、次のような3つの視点から論じられている。

1 女性史からの考察

女性の地位や社会的役割を研究する上で、女性雑誌が分析の対象となっている。

女学校の成立とその拡大によって女学生が急増したことが分かっている。

2 出版史からの考察

女性雑誌が出版史の中でどのように位置付けられるかという立場からの考察されている。

女学生の急増から卒業生の増加と同時に出版社がこぞって雑誌を創刊し販売部数を競い合ったことが言及されている。

3 読者論からの考察

近代文学がいかに読者に受け入れられていたかといった読者論の立場から分析されている。

知識欲旺盛な女性の増加や当時の修養主義などから文化主義へと読者の趣向に変化があったことが指摘されている。

更に『婦人界』について話を限定すると、『婦人界』は『教育界』に始まる『〇〇界』シリーズの第6弾として金港堂書籍株式会社から1902年（明治35年）7月に創刊されている。その2年後、一度休刊するが、1909年（明治42年）5月に復刊する。しかし、あまり売り上げが伸びず、1917年（大正6年）8月で廃刊の憂き目に遭う。その後、同名の雑誌が東京社から刊行され、1923年（大正12年）婦人界社に引き継がれていく。このことから、『緑色の文字』は、東京社から刊行された雑誌『婦人界』に掲載されたことが分かる。

内容も、明治期には総合誌であったのに対し、大正期の『婦人界』は生活実用誌へと変化している。浜崎廣の研究<sup>4</sup>では、「読み物主体」の『婦人界』と「見る物主体」の『婦人画報』の対決では、『婦人画報』が勝利を収め日本一長寿の女性誌となった経緯が詳細に説明されている。当時の『婦人界』には、「読み物主体」といわれるほど小説や詩、児童劇などが紙面の多くを占めていたことが分かる。

当時の読み物としては、婦人誌が必ずしも婦人に限定された作品を掲載していたわけではなかった。児童雑誌や少女雑誌で育ってきた世代にとって、童話が掲載されていても違和感がなかったからだ。また、読者である母親が子どもに「読み聞かせ」る材料を提供するという理由で、掲載された童話や童話劇がよく親しまれていた。従って『婦人界』に童話や児童劇が掲載されていてもおかしくはなく、童話か小説かを読者は強く意識するわけでもない。読者側にとっては、ジャンルなどさしたる問題でなかったと考えられる。当時の女性が修養や娯楽を目的として女性雑誌を購入していた。『緑色の文字』も、一編の「読み物」として読まれたのではないかと推測できる。

## 2 『緑色の文字』の内容概観

日本聖書翻訳史によると、1887年（明治20年）、米国、英国、スコットランドの聖書協会の経済的助力により、新旧約全部の翻訳が完成した。これは、「明治訳」（元訳）と言われるものである。旧約聖書は、今でも「文語訳」として用いられているので、犀星は文語訳の旧約聖書を読んでいただと考えられる。<sup>5</sup>

その文語訳の旧約聖書の言葉と、『緑色の文字』や現在各教会で使用されている『新共同訳聖書』について、対照表を作ると次のようになる。

文語訳『舊新約聖書』、『緑色の文字』、『新共同訳聖書』表記対照表

文語訳『舊新約聖書』(1887)	『緑色の文字』(1921)	『新共同訳聖書』(1987)
ネブカデネザル	ネブカドナザル	ネブカドネツアル
ベルシャザル	バルタザル	ベルシャツアル
妻妾	妾婦	後宮の女たち
文字	緑青色の顫える文字	文字
第三の牧伯	第三の牧伯	第三の位
博士	智者	占い師
法術士	法術師	祈祷師
カルデア人	カルデア人	賢者
ト筮師	ト筮師	星占い師
メネ	メネ	メネ
テケル	テケル	テケル
ウバルシン	ペレス	パルシン

犀星は、『緑色の文字』を書くにあたって、当時の聖書の言葉を多く借用していることが分かる。

次に、『緑色の文字』のストーリーを概観してみよう。原典は、旧約聖書ダニエル書第5章であることは内容が酷似していることから明らかである。ダニエル書は、夢や幻という形で神の預言がダニエルによって語られる「黙示文学」の祖といわれる箇所である。ダニエル書は、第8章まで次のように構成されている。

第1章 バビロンの宮廷でのダニエル（ダニエルの生い立ち）

第2章 巨大な像の夢（夢解きによって王から高い位が授けられる）

第3章 燃え盛る炉に投げこまれた三人（ダニエルの友三人が許され高い位につく）

中 島 賢 介

第4章 大きな木の夢（夢解きの話が現実化する）

第5章 壁に字を書く夢の幻（ベルシャツアル王治世の崩壊）

第6章 獅子の洞窟に投げ込まれたダニエル

第7章 四頭の獣の幻

第8章 雄羊と雄山羊の幻

紀伝体で書かれているため年代は前後している。第5章「壁に字を書く幻」は第7章第8章に続く話である。第6章は、ダニエルがその才能により、周囲からの反感を買い、陰謀を企てられ獅子の吠えたける洞窟に放り込まれる話であり、第5章の話とは全く異なっているため、「壁に字を書く幻」の話は一旦途切れる。第7章、第8章には、ベルシャツアル王治世元年に見た夢と、その意味についてある人の解釈があり、ダニエル自身が恐れ、病に倒れたといった記事が見られる。その夢があまりにも具体的で示唆に富み、その勢いに圧倒される彼の姿が記されている。こうした背景があって第5章に続くと考えられるので、時系列に並び替えると、第7章、第8章、第5章となる。主人公は、あくまでもダニエルである。一連の話によって、ダニエルが王に文字解きをするための経緯がどれほど凄まじいものであったかを著者は記そうとしたと思われる。

第5章は、ネブカドネザルの王位を継承したベルシャツアルが、酒宴に現われた人の手が王宮の壁に文字を書き始めたことに恐怖を感じ、文字を読んで意味を正しく伝えることができる者を探す話である。夢を解くダニエルが呼ばれ、ベルシャツアルが王として役不足であり、彼の治世は長く続かないと預言する。すると、その預言は見事的中し、ベルシャツアルは殺されてしまう。

この物語に犀星はヒントを得て、『緑色の文字』を執筆したものを思われる。構成は、前半はダニエル書に準拠はしているものの、後半において、王母が祈ることを王に忠言し、王もそれを守り日夜祈りを続け、小さな宴会を開いているうちに、王は治世終焉の時に臨むといった場面が挿入されている。

### 3 原点との比較考察

「ダニエル書」は、ダニエルの伝説を基本に、シリアの王アンティオコス四世の迫害に悩むユダヤ人を激励するために紀元前168～前164年頃書かれた黙示文学であるとされている。第5章に登場するベルシャツアル王は、実際はネブカドネザル王の孫であったという説がある。このダニエル書から『緑色の文字』が生まれたことは、内容からして明白である。偶像を崇拜し、遊蕩三昧の日々を送っていた頃、突如として宮殿の壁面から手が出現し、不可解な文字を残していく。その文字の意味が理解できる者が宮殿におらず、必死に探し出そうとする王の許に、預言者ダニエルが呼ばれその文字の意味を解説する。その意味が王の治世の終焉を告げる内容だと分かり、預言通り王の治世は幕を下ろす。

この話をもとに、犀星はどのように童話として作品化したのであろう。

まずは、冒頭の場面である。

『旧約聖書』

ベルシャザル王その大臣一千人のために酒宴を設けその一千人の者の前に酒を飲たりしが、酒の進むにいたりてベルシャザルはその父ネブカデネザルがエルサレムの宮より取きたりし金銀の器を携へいたれと命ぜり是王と妻妾等みな之をもて酒を飲んとてなりき、是をもて飲めり。(1節から3節)

『緑色の文字』

王宮の広間にも、折々ペルシャ王シルスやメジア王ダリウスの、その二方の敵軍の燃えるような声が、酔いつぶれているバルタザルの耳底を、ゆめうつつのように脅やかした。バビロンの王位に即いたバルタザルは、敵の包囲の中にも、日夜近国の処女達を薄い帳のなかに、霧のように透し見える裸形の舞踏や、美しい妾婦の侍づくのに任せて、多くの大臣等と酒池の宴を張っていた。

旧約聖書では、大宴会の様子を、エルサレム神殿から略奪した宝物の数々で王や貴族、後宮の女たちが酒を飲み、イスラエルの神ではない神を崇めた光景が描かれている。『緑色の文字』では、後宮の女との会話が次のように挿入されている。

『緑色の文字』

「この輝いた色をみよ、燭の光をあててみると、まるで虹のようだ。」

王は、こういうとその盃に妾婦の唇にあてた。身をよこたえ、豹のような美しいうねりを見せた彼女は、その黄金の盃に、炎のように紅い唇をあてた。が、その顔色はすぐ蒼褪めてしまった。

この挿話は、自分は神殿から略奪した宝物で飲み食いするができないと王に告げる場面である。女は、神殿にあったものを汚れた口にあててはいけないと固辞すると、王は怒り、バビロンの王は自分なのであると叫ぶ。その時、王は冷たく蒼ざめている女の姿を見る。大臣達も「忌わしい曇り」を感じている。このことから、犀星は聖書が淡々と描いている場面を丹念に再構成しようと試みていることが分かる。

その後、何者かの手が現われて、壁に文字を記していく場面では、王がその場面に遭遇した前後の様子も異なっている。

『旧約聖書』

その時に人の手の指あらはれて燭臺と相對する王の宮の粉壁に物書り王その物書る手の末を見たり、是において王の愉快なる顔色は變りその心は思ひなやみて安からず腿の關節はゆるみ膝はあひ撃てり(5節から6節まで)

『緑色の文字』

みんな一斉に不思議な緘黙を続けたとき、ふいに正面壁上にあった帳が動いた。風もないのに何者とも知れない一本の強健な手首が、何か書きちらしている様に王には思われた。

中 島 賢 介

「あの帳を取れよ。何者かが潜みいるようだ。」

王の声の終わらぬうち、奴隷は、立って帳を切り落したときは、不思議な文字が書かれてあった。王も大臣も真蒼になった。

聖書では、王は恐怖にかられて表情が一変し、腰が抜け膝が震えたとかなり描写が細かい。王の驚愕する描写は、それまでの王の姿の描写がない分、事態の急変さをよく伝え、傲慢な王の裏側にある精神的な弱さ脆さを際立たせている。また、怯えている人物が王に限定されているところも注目すべきである。しかし、先ほどとは逆に『緑色の文字』では、「王も大臣らも真蒼になった。」という表現に止まっている。手首の出現に驚いた王の姿は、「大臣」と並列させることから、王の驚きよりもその場の異様な雰囲気を描くのみにとどまっている。この相違は、双方の作者の、王の性格付けから来ていると考えられる。王の恐怖をそのまま描く聖書においては、主人公があくまでも「ダニエル」であり、王はダニエルに預言の機会を与える役割に過ぎない。それに比べ、『緑色の文字』では主人公は王であり、王に関する描写は極めて淡白に描いている。これは、続く「祈り」の場面につなげるため、そうする必要があったからではないだろうか。このことに関しては、次の章で述べる。

また、王の前に召しだされたダニエルの言葉からもダニエルと王との関係を示す相違が見受けられる。旧約聖書では、「汝の賜物は汝みづからこれを取り汝の餽物はこれを他の人に與へたまへ然ながら我は王のためにその文字を讀みその解明をこれに知せてまつらん」(17節)と、ただ王のために文字を讀み解釈するためだけに来たとだけ書かれているが、『緑色の文字』では次のようなダニエルの言葉が続く。

『緑色の文字』

王は、王母の前を退いて、ダニエルを呼んだ。ダニエルは蒼白なる面で、王の前にすすむと壁上の文字をちらりと眺め、冷やかに言った。

「王よ、わたしの望むものは紫衣の服いでもなければ、牧伯の冠でもないでございます。ただ、王の隠れたる明智を啓きたいのみ思うのでございます。」

ダニエルは、そういうと、またその衣服を伸した。

「王よ、わたしの語らうところによって、王の御心を悩ますかもしれません。王はあるいは信じられないかも知れない。しかし王よ、わが心は今自分の心ではない。あの文字を体した心であることを、さきに御心に置き下さい。」

ダニエルは、そういうと更に冷やかに王をとりまく人々、たとえば美しい肌をさらしている畜妾、銀をちりばめた大臣らの衣冠を尻目にかけた。

『緑色の文字』には、旧約聖書にはない、ダニエルの、王に対する細やかな配慮と臣下に対する冷淡な態度を描いている。王に文字の謎を解いて聞かせるダニエルについての描写は、旧約聖書に

は全く出てこない。ただ、事実のみが淡々と記されている。一方、『緑色の文字』では、預言の内容よりもむしろその後の王の様子に力点を置いている。後述するが、この場面こそが犀星の描きたかった王の姿であり、ダニエルの姿であるということが出来る。『緑色の文字』におけるダニエルの預言はこれで終わらない。

#### 『緑色の文字』

「むかしから謎や暗示は、いたるところに現われております。この壁上の文字にしても、今にして王はその行いを改められなかったら、ついにどういう御怒りに触れるか分かりません。王よ、王の父君よりももっと王は恐ろしい罪を犯したものと言わねばなりません。」

王は、愁然として頭を垂れ、寂しげに呟きさえた。

(ダニエルの結語)

「(略) 王よ、王はその明智でよく頭をめぐらさしたまわんことを祈ります。」(下線は論者)

このダニエルの発言には、下線部の言葉からまだ王には改善の余地を残されていることが分かる。しかし、最後の言葉を聞いた王は一層深い悲しみを襲われている。この言葉を聞いていた王母は、神の手を離れても祈りを忘れるな、ヨブのように試練を与えられても祈りをとめてはならぬと忠告して去っていく。王母が去った後、王はダニエルに「もはや時は遅いか」と聞くと、ダニエルは黙って頭を垂れる。ダニエルの沈黙によって、王は自分の運命はすでに決定づけられたと悟るのである。

#### 4 挿入された「祈り」の場面

物語の結末は、旧約聖書では、「その同じ夜、カルデア人の王ベルシャツアルは殺された。」とあり、預言を聞いてから殺害されるまで、時間的猶予はなかったと思われる。そこに王の苦悩があるとすれば、読者は行間で想像する他ない。最後までダニエルと王は、預言者と統治者以外の何者でもなく、ましてや両者の間に心の交流をあったと考えるには無理がある。

もっとも、旧約聖書はその前後の文脈があるので、ダニエルが文字の解読までどの位驚愕し、苦悶し、疲労したかは理解できる。しかし、ベルシャツアル王の様子については、第5章の記事以外には見当たらないため、その先は推測の域を超えることはない。

それに比して、『緑色の文字』では、後宮の女と王の会話、王とダニエルとの別れの場面が本文の三割もの分量で描かれている。

まず、王と後宮の女との会話だが、預言が終わった後、王は日夜神に祈りを捧げていたが、今度は妾だけを呼んで小宴会を催した。そして、妾に慰められる王は、次のような言葉を発してその悲しみを妾と分かち合う。

#### 『緑色の文字』

王は日夜神のために祈った。踊り女はその宮殿から下ったが、蓄妾の姿美しきものばかり、バルタザルは、

中 島 賢 介

王宮の奥深くかくまいこんで、ひっそりと些やかな酒筵をしていた。(中略)

「わが運命はもはや神の前でさえも空しいと聞いている。わが祈りのたび繰り返すとも、わが命運はもう蝕ばんでいる。汝のいうごとく、この一瞬にかわるもの、何ものもない。」

この場面で、初めて王は自分の「運命」について口にしている。自分の側近たちには打ち明けず、妾にだけ告白するほど王の心は荒んでいた。この箇所、没落していく王の姿が端的に描かれている。更に、王は幻聴を聞くことになる。妾には、「清いしずかな川のささやき」を聞くが、王には「敵軍の燃えるような人声」にしか聞こえない。そして王は城壁の上に立ち、「静かに祈りに祈った」。そこへ、王に近づくダニエルの姿があった。祈りが終わったかと聞くダニエルに、冷然としている王は次のように言う。

『緑色の文字』

「ダニエルよ、こんなにまで静かな心もちになったことは始めてだ。もうわたしには遠い包囲軍の声なぞは却って聞えてこない位だ。わたしはわたしの在るところを刻々と知るのだ。」

王の言葉を受けて、ダニエルは言う。「王よ、王の静かにこそ、ダニエルも悲しくは思いません。」寂しげにダニエルの顔を見返した。そしてダニエルに自分の手を握らせる。この場面で作品はクライマックスを迎える。しかし、最後に王は、聖書の文脈からは全く予想だにしない言葉を告げる。

『緑色の文字』

「ダニエルよ、あの謎の文字がどんなに遅く現われても、また現われなくとも、それは吾にはかかわりのないことだ。」

バルタザルは、そういうと、ダニエルの瞳に譴責の表情を読んだが、ダニエルは再び何も言わなかった。

ダニエル書には、ダニエルが自分の夢に怯えたという場面が示すように、『緑色の文字』に見られる冷淡さは表現されていない。しかし、『緑色の文字』におけるダニエルは「冷ややかに言った」「更に冷ややかに」という言葉にあるように、周囲には冷徹な存在として描かれている。「祈り」場面で王は、母親がいる前では言えなかった「もはや時はおそいか」というダニエルに発する。それは、王の母親への配慮である。ダニエルもまた、王母がいる前では希望のある話をしたが、王にだけは正直な反応を示した。

また、王は、大臣たちにも本当のことを告げなかった。もはや自分の気持ちは後宮の女としか分かり合える存在を持たなくなっていた。ダニエルもダニエルで、周囲には冷淡であっても、王にだけは気持ちを素直に表している。『緑色の文字』では、ダニエルが預言者という役割を超えて、唯一の理解者になっていることから、真に孤独であったのは、唯一神を拝まず禁忌を犯した罪深き王であったということが暗示されている。



## おわりに

『室生犀星文学年譜』<sup>6</sup>によれば、1912年（明治45年）「本郷の縁日で五銭で『聖書』を求め、他に読むべき本がないので明けても暮れても読んでいたらしい。」とあり、1914年（大正3年）には「『聖書』を耽読し」山村暮鳥らと交流し、1916年（大正5年）には「キリスト教に関心を寄せ」、前田夕暮をして「室生犀星君のキリスト教に就ての評論も次号からの」といわせたが実現しなかった。更にドストエフスキイの作品を盛んに読んで、「聖学院の教会に通」った。これらの記録を見るだけでも、いかに犀星が聖書を深く読み込んでいたかがよく分かる。

確かに多作の時代であり、他の作品にも聖書からの引用が散見されるため、偶然聖書を紐解いた時に出くわした程度の創作動機であったかもしれない。また、初期詩作品に見られる強い宗教性こそ感じられない。だが、それだけ彼の身近に聖書があったことは紛れもない事実であり、信仰までは至らなかったが、彼が聖書と対峙した結果生み出された童話であるということができる。

## 追記

因みに、この謎の文字を解き得る人物がダニエルにおいて他にいないことを知らせる役割が、『緑色の文字』では「王母」となっている。これは、文語訳の旧約聖書には、「時に大后王と大臣等の言を聞てその酒宴の室にいりきたり大后すなはち陳て言ふ願くは王長壽かれ汝心に思ひなやむ勿れまた顔色を失ふにおよばず」（10節）と「大后」と訳されていたことによる。しかし、現在使用されている新共同訳聖書では「王妃」と訳し直されている。訳語の相違が物語全体に影響を及ぼしていることを指摘しておく。仮に、この「王母」が文語訳聖書で「王妃」と書かれていたとしたら、『緑色の文字』のストーリーも変わっていたのではないだろうか。後宮の女と酒を酌み交わす場面を書く動機には繋がらなかったかもしれない。

## 注釈

<sup>1</sup> 『室生犀星全集』新潮社 1964年（昭和39年）

他に全集としては、『室生犀星全集』非凡閣 1936年（昭和11年）と『室生犀星作品集』新潮社 1958年（昭和33年）があるが、『緑色の文字』は、非凡閣版にのみ収録されている。

<sup>2</sup> 『室生犀星童話全集』創林社 1978年（昭和53年）から本文を引用した。

<sup>3</sup> 久保忠夫氏の論文は『室生犀星研究』有精堂 1990年（平成2年）に纏められている。

<sup>4</sup> 浜崎廣『女性誌の源流 女の雑誌、かく生まれ、かく競い、かく死せり』出版ニュース社 2004年（平成16年）

<sup>5</sup> 日本聖書協会のホームページ参照

<sup>6</sup> 室生朝子他編『室生犀星文学年譜』明治書院 1982年（昭和58年）

## 参考文献

『定本室生犀星全詩集』全3巻 冬樹社 1978年（昭和53年）

『室生犀星』石川近代文学全集3 能登印刷出版部 1998年（平成10年）

船登芳雄『評伝 室生犀星』三弥井書店 1997年（平成9年）

田邊徹『回想の室生犀星 文学の背景』博文館新社 2000年（平成12年）

前田愛『近代読者の成立』岩波同時代ライブラリー 1993年（平成5年）